

鼻の助太郎（丹南町）

むかし、丹波の篠山に近い真南条（まなんじょう）という村に、助太郎という木挽（こびき）が住んでいました。

毎日近くの山へ行っては木を切っていましたが、そのよめさんというのが大変な食いしんぼうで、助太郎がらすになると、いつでもうまいものをつくって、ひとりで食べていました。

それを知った助太郎は、ある日山へ行くふりをして、そっと天井裏（てんじょううら）へかくれてみておりました。

それとも知らぬよめさんは、ぼた餅（もち）をたくさんつくって、五つ六つ食べた残りを長持（ながもち）の中へかくしました。

助太郎は知らぬ顔で、帰って来たふりをして、

「きょうは山で、天狗（てんぐ）さんに何でも鼻でかぎあてる術を教えてもらった。」

と言いながら、そこらをかぎまわるふりをして、長持のぼた餅を見つけたので、そのことが村中の評判になりました。

すると、ある日、本家の奥さんの大切な指（ゆび）わがなくなって、助太郎さんの鼻でさがしてもらおうということになりました。助太郎が困っているところへ、本家の女中がこっそりはいて来て言いました。

「あの指わは、わたしが倉の右側の石の下にかくしています。わたしがとったことはいわんと（いわずに）いてください。」

助太郎はよいことを聞いたと、さっそく本家へ行って、うまくかぎあてたふりをして、たくさんのお礼をもらいました。

ところが、このことが、とうとう都まで知れて、こんどはえらいことになりました。というのは、時の天子さまのご病気の原因をかぎ出すようにという使（つかい）が、都からきたのです。

仕方がないので、助太郎は都への旅にでました。途中、伏見（ふしみ）の稲荷（いなり）さんへ参（ま）つての帰りに野雪隠（のぜんち）（野原の便所）にはいつていると、三人の旅人が、助太郎がいるとは知らず、

「御所（ごしょ）の乾（いぬい）の隅（すみ）にある梨（なし）の木の、三尺下に埋（うず）もれている刀を掘り出せば、天子さまの病はなおるんじゃない。」

と話しながら、通りすぎました。

助太郎は、これこそ稲荷さまのお告（つ）げであろうと、すぐ引き返（かえ）して、お礼（れい）まいりをしてから御所（ごしょ）へ行き、うまく刀のありかをかぎあてて、大変なごほうびをもらって帰り、大きな屋敷（やしき）を建てたということです。

今も助太郎屋敷というのが村に残っています。

